

(2) 議論した内容の発表

片田 第1回は、「顔合わせ会」ということで、釜石市に行って、その地でまずは同じスタートラインに立つことを目指したため、議論する時間があまりありませんでした。逆に今回はまだやるかというくらい皆さんで議論しようと思っています。これまでの議論を踏まえて、これからに向けての方向づけができるといいかなと思います。それと、今日ここで、連絡協議会としての共通認識を図っておきたいと思っています。そして、そのうえで、次の黒潮町での議論につなげていきたいと思っています。現段階で、我々の議論はどこまで深まったのか、という共通認識を図るための全体討論という位置づけをしていきたいと思っています。



片田 敏孝教授

皆さんのグループ討論の様子を見ていて思ったことは、防災教育として考えていることに対して、先生方とは共有認識が出来つつあるなと感じました。数年前の自分に立ち返って考えてみてください。その頃の自分の考える防災教育は、やっぱり“災い教育”でしたよね。災害と現象のみを見て、「津波が来るからどう逃げるか」とそれだけが頭の多くを占めていたのではないのでしょうか。津波であったり、洪水であったり、いろいろな災害がありますが、総称するならば、“逃げろ逃げろ教育”であったんだろうと思います。いま、どうでしょう。様々な議論を通じて、先生方が何となく認識しておられることは、防災教育はもちろん“逃げろ逃げろ教育”の部分もあるんだけど、それ以上に、防災教育を介して得られる教育効果は、単に「逃げろ逃げろ」と教えることよりも、大きな枠でその効果が期待できるという認識をお持ちになっていただけたんじゃないでしょうか。「確かにそういう成果はある」という現場からのお声もたくさんいただきました。「防災教育をやっていたら子どもたちの学力があがった」、数年前に聞けば、「本当かよ」と思うような、「風が吹けば桶屋が儲かる」みたいな話まで出てきました。でも、その効果の発現構造を考えると、何となくそうだろうなと納得できる場所があります。いじめの問題など、いわゆる今日の学校問題もいろいろあります。あんなに苦労して、解決しようとしてもなかなかうまくいかなかったことが、防災教育をやって、子どもたちがじいちゃん、ばあちゃんのことを、小さな子どもたちのことを考え、共通の敵である津波に向かい合うことを介して、自分のなすべきことは何なのかということを考えるようになった。その結果、子どもたちに、以前であれば考えもしなかったような“配慮の心”が芽生え、結果的にそれらの問題も解決していた。“命の教育”に及ぶ効果もでてくる、という実感を僕らは得たんじゃないかなという気がします。

いま、あらためて僕たちの考える防災教育を考えてみます。もちろん「その日そのときちゃんと逃げられる子に育む」ことは一義的にはあると思います。しかし、そこからさらに欲張って、防災教育のもつ可能性として、「防災教育を一生懸命やっていくと、こんなにも子どもたちの可能性を伸ばすことができる、引き出すことができる」という情報を、このグループから発信できるようになれば、おそらくこの場にはない全国の先生方、特にこれまで学力の問題やいじめの問題などに頭を悩ませておられた先生の中に、「なるほど、こういう防災教育の枠の

中で、解決の可能性もあるな」と気づき、「防災教育やってみよう」と思う先生がもう少し増えてくるように思います。そういう面で自負しているのは、このグループが一番防災教育の可能性を知っている。一番幅広く捉えているグループだろうと思います。全国に防災研究者はたくさんいるわけですし、僕らも学会なんかを通じて他の大学研究者、防災研究者と議論しますが、彼らとて防災教育は、まだ“逃げろ逃げろ教育”の範疇にあるように思います。「どうやってちゃんと逃げて被害を軽減するか」ということだけで、防災を捉えているように僕は思います。でも、僕らはその領域は脱しているのではないのかなど。僕らは防災教育を介して、子どもたちの人間教育というのか、“生きる姿勢”、“主体的に物事を判断し、自分の判断で自分の足でしっかり歩いていける子どもたちを育てていく”ことができる可能性があることに気づいている。それに気づき、それを効率よく進めるためにはどうしたらいいのかを議論している。そういう意味で、このグループは、おそらく日本で一番防災教育を幅広く捉え、より戦略的に教育という面で活用していこうという非常に積極的に防災教育を捉えている、その最先端にあるグループなんだという自負もあります。

今日のグループディスカッションまでの議論の一つの成果である、新庄中学校の子どもたちは、物怖じせず、僕らの問いかけにもちゃんと答えられていました。どうでしょう、あの学校の子どもたちの振る舞いに成果を感じ取ることができましたよね。おそらくそれは先生方の学校でもそういう効果が確認されつつあるんだろうと思います。そういう枠組みの中で、これまでの議論を総括していきたいなと思います。もちろん「まだまだその域には達していない」という批判も含めて構わないので、これまでの成果について、この場で皆さんと共有認識を図りたいと思います。そのうえで、次回の黒潮町では、その次の議論、もしくは別の角度からの議論に展開していきたい。黒潮町で次のフェーズに入っていけるように、ここまでの総括をしたいと思います。思ったことをいいこと悪いこと含めて全部さらけ出していただき、それを踏まえて、良かれところはさらに伸ばし、改善すべきところはさらに改善していきたいと思っています。

a)小学校グループ1

発表者 濱野 公壽 (尾鷲市立尾鷲小学校 教頭)

濱野 ここから3時間ほど車で走っていただければ、尾鷲に着きます。三重県の東紀州地域といわれています。電車ではなく、ディーゼル機関車が2時間に1本ぐらい走っています。昨年、やっと名古屋方面からの高速道路が尾鷲までつながったので、津市まで2時間程で行けるようになりました。ただ、名古屋まで出て行くのに、ものすごく時間がかかりますので、東京から時間的には一番遠いところといわれています。尾鷲市は、人口が最も多かった頃で35,000人ぐらいでしたが、今はとうとう20,000人を切ってしまいました。



濱野 公壽先生

先ほど片田先生の方からも、「逃げろ逃げろ教育」ではないだろう」という話があったのですが、自分たちもそのような話になりました。効果については、「教育の目的を達成すること」とまとめました。かなり抽象的な言葉になってしまうのですが、「防災教育をすれば、防災の力だけが伸びるわけではない」ということです。その中には今まで盛んに言われている、人権教育であったり、いろんな教育がありますけれども、そういうものが全部含まれているのではないだろうかということです。昨日も「防災教育をしたら、学力はあがったか」と言われても「ちょっと…」と言う話も出ていました。きっとその学力というのは、今盛んに言われている学力学習状況調査の学力だろうと思います。しかし、子どもたちは、それでは評価できない学力もいっぱい持っていると思います。あの調査では評価できない力もどんどん伸びていくと思います。そして、本当に仲間の命を大切にしようと考えていくなかで、きっと子どもたちの学力学習状況調査の学力も伸びていくと、自分たちは信じたいな、きっとそうだって思っています。

“育てる”ために、当然知らないことは教えることも大事ですが、教え込んでいくことは良くないんじゃないのか。やっぱり子供たちが「自分たちで考える」とか「自分たちで課題を見つける」ことが大事になってくるのではなかろうかということです。どうしても教えマンみたいになってしまうのですが、自分たちで「何を教えるんだ」「どこまで教えるんだ」という点をしっかり考えて、“教える”ということよりも、“子供たちに育ててもらおう”という指導力があるのではないだろうかということです。

それから、やっぱり意欲・態度を子供たちに構成しておくことが大事なのではなかろうか、そこにはやっぱり地域も入ってくるんじゃないのかなということです。それで、子供たちに教え込んでいくのではなく、「子供たちが課題を見つける」であったり、「子供たちが自ら体験する」であったり、子供たちの思いや要望にマッチした実践を、如何に組み立てるかが必要になってくるのではないかと。お互いに話をしたり、伝え合ったり、学びあったりすることによって、子供たちの力でお互いに学び合いながら伸びていくというような実践が必要になってくるのではなかろうかなという話をさせていただきました。

テーマ 2 です。「どのような実践が考えられるのか」ということで、「顔と顔が見える実践」とまとめました。これは子ども同士も当然そうですし、子どもと教員の学校の中でもそうだと思うのですが、「地域の方が子どもたちの顔を見る、子どもたちが地域の方の顔を見る」といった実践が大事なんじゃないでしょうか。地域の方々が、荒れた中学生、荒れた中学校の姿を見て、「怖い」という認識を持っていたのが、実際に子どもたちが訪れてくると「違うんだ」という思いを持つ。そして、その子どもたちが、命を守るためにいろんな取り組みをしていることに気付いたときに、地域の方々が、「ほっとする」「勇気付けられる」「元気になる」ということがあった。そのような話もあり、やっぱり、みんなで顔を合わせてというような実践が大事なんじゃないかなろうかという話をさせてもらいました。



それから「地域との障壁を乗り越える」というところです。これは、私たち教員はやっぱり自分の心の中にバリアがあって、「地域に入ると面倒くさいよな」とか「鬱陶しいよな」とかそんな思いがあります。どうしてもバリアを作ってしまうと、「地域の方を入れない」だとか、逆に「自分たちが地域に出て行かない」ということになりがちなんじゃないかなろうかと。そこで、人権教育でもよく言われますが、「心のバリアフリー」がやっぱり大事なんじゃないかなろうかということですね。それから、うちのグループには行政の方もいらしてくれまして、その方も「実は、行政も壁があって、なかなか受け入れられにくい」と話されていました。ただ、その方が言われるには、「やっぱりその一人ひとりの思いですよな」、「バリアは人間によって作られているんだから、人間で外せますよな」という話になりました。

それから、「どのような連携をとったか」というところです。どこも同じような感じで、自治会、町内会、消防団、地域の防災と連携していました。一つ課題としては、自治会に参加しない住民がたくさんいるので、自治会が成立しないんですね。だから、自治会の方に「これちょっとすみません、地域に回してください」とお願いをしても、なかなかそれが地域全体に行

き届いていかないということがあります。そのため、連携するにしてもいろいろ難しいことがいっぱいありますね、というような課題が話されました。

それから、「継続のために取り組んだこと、仕組みのあり方」というところです。うちの小学校では、「命の架け橋」というのが作られました。うちの学校の標高が約 11mなのですが、安全とは言い切れないんですね。そのため、学校の裏にある標高約 45m の中村山が避難地になっております。しかし、登る道が細い道が 3 本くらいあるだけでした。当然、学校周辺の住民もそこをめがけて逃げてきますので、道が渋滞してしまい、とてもじゃないけれども登りきれないだろうと、対応を悩んでいました。そのような状況で、尾鷲市は 3,000 万円かけて、子どもたちのために、学校の教室から直で中村山に行けるように避難のための橋を作ってくれました。私たち教員は「防災教育しなきゃいけないよな」と思うようになりました。この橋が尾鷲小学校の防災教育のシンボルになってくれるのかなと思っております。

あとは、やっぱりよく言われるのが、「地域とどのようにつながっていくか」ということです。尾鷲市の人口は、19,000 人ほどで、少子高齢化がとんでもなく進んでおります。以前は漁業と林業で栄えた町なんですけど、ともに廃れていっております。尾鷲小学校に 503 人の児童がいますが、児童の保護者の中に本当に純粋な林業・漁業にかかわっている保護者は 0 だと思えます。そのような状況をみていくと、下を向かざるを得ないような地域なんですね。釜石で言えば鶴住居のような地区になると思いますが、周辺部の地区に行きますと、もう小学校もなくなっちゃいました。おじいちゃん・おばあちゃんしかおりません。たまに遠足で子どもたちを連れていくと、「久しぶりに子どもの声を聞いた」と大喜びして下さいます。そんな地域なんですね。だから、そうゆうことを学んでいくと、現実を知っていくと下を向かざるを得ないんです。でもそこで生き抜いていかなければなりません。そんな状況ですが、違うんです。「尾鷲って素敵だよ」「尾鷲節があるよね」「ヤーヤ祭りがあるよね」と、素敵なところがいっぱいあります。海もきれいです。魚も美味しいです。尾鷲ひのきがとっても有名です。関東大震災の時に、関東で倒れなかった家は尾鷲ひのきが使われておりました。素敵なところもたくさんありますので、やっぱり子どもたちが「前を向ける」「上を向ける」そんな教育をしていかなきゃいかんかなと思います。でも、本当に仕事がありませんので、子どもたちは外へ出て行くんですね。早い子は高校から外へ出て行きます。尾鷲から出て行かなければ大学には通えません。仕事もそうです。ただ、尾鷲から出て行って、いろんなところで生活している人たちが「自分のふるさと尾鷲なんだ」、「こんなええところなんだ」って思ってもらいたい。地震が来るかもしれない、津波に襲われるかもしれない、屋久島に抜かれて日本で 2 番になっちゃったんですが、雨もたくさん降ります。そんなところですけども、どこに住もうが、どこに行こうが「素敵なおとこなんだよ」と思ってもらえる、思えるようなそんな教育をしていかなきゃいかんかなと思っています。最後は本当に自分の個人的な思いを語ってしまいました。

b)小学校グループ2

発表者 嶮口 善一 (田辺市教育委員会事務局学校教育室 主任指導主事)

嶮口 田辺市の嶮口と申します。最初に、せっかく来ていただきましたので、田辺市の話を少しさせていただきます。昨日の冒頭の挨拶から田辺市防災教育担当者会の会長のプレゼン、シンサイミライ学校の発表、それから今日の授業等々を見ていただきましたが、先生方はどう思われたでしょうか。新庄中学校の地震学の取り組みは、15年目になるんです。そして、田辺第一小学校と高雄中学校のシンサイミライ学



嶮口 善一先生

校は片田先生が来ていただいた3年前になります。この3つが田辺市を代表する学校なのです。ですから、市内に41校の学校がある中で、それ以外の学校の防災教育はどれくらいのレベルにあるのかを考えた時に、教育委員会も反省しなければいけないとなりました。新庄中学校があんなにすごい活動を続けてこられたのに、それを教育委員会として広げることをしなかったことを反省いたしました。そこで何をしようかとなったときに、この沿岸部地域、山間部地域、中山間地域の3種類の災害種別があるので、大変だけでも先生方が中心になってやっていく組織をつくることになりました。子供が主体的になるということは、先生方が主体的にならなければいけません。そして、会長を寺本先生に引き受けていただき、管理職主導でも教育委員会主導でもない組織を立ち上げました。それで、この組織で何をしようかという話になったときに、釜石市の防災教育手引きや和歌山県の手引きを活用した取り組みがあったのですが、田辺市は「自分たちでないところから作っていこう」となりました。作ることを通じて、先生方の意識が高まるのではないかと考えてやり始めていったんです。作り始めてから約1年半で一応完成しました。まだ整理できていないんですけども、たぶん70~80ぐらいの指導案が出来上がったと思います。最初はまったくないところから始めたので、各グループで「さあ、作ってください」と言っても、金井先生とかに教えていただいて、ある程度は頭で描けるんですけども、自分たちが今まで全く教えたことがない領域ですから、なかなかうまく進まず、途中で「ちょっと気持ちが落ちてるな」という感じもありました。しかし、「いつまでに仕上げよう」という会長の強い気持ちがあったので、最後は先生方が非常によく頑張ってくれたなという気がします。組織を立ち上げた当初、教育委員会主導で会を運営し、会の最初と最後の挨拶も教育委員会の課長がして、「皆さん、お願いしますね」というスタンスでやっていた時と、途中から寺本会長が牽引するようになってからは、先生たちの目の色が全然違うんですね。「上から言われる」、「やらされている」ではなく、やっぱり「自分だけでやっている」というのがすごく大事なんではないかなということを話させていただきます。

もう1つすみません。お昼にお話していただいた新庄愛郷会の真砂会長さんは、85歳なんです。先日、達筆な字で僕に「これでいきます」ということで発表内容を事前に持ってきていただきました。今日はその原稿をほとんど覚えられていました。この話を持っていかせていただいたときに、会長さんから使命感が伝わってきて、あの地域に住まわれている人だなと感じました。「行政が甘いよ」というようなことも言いましたが、もと田辺市の助役さんなんです。

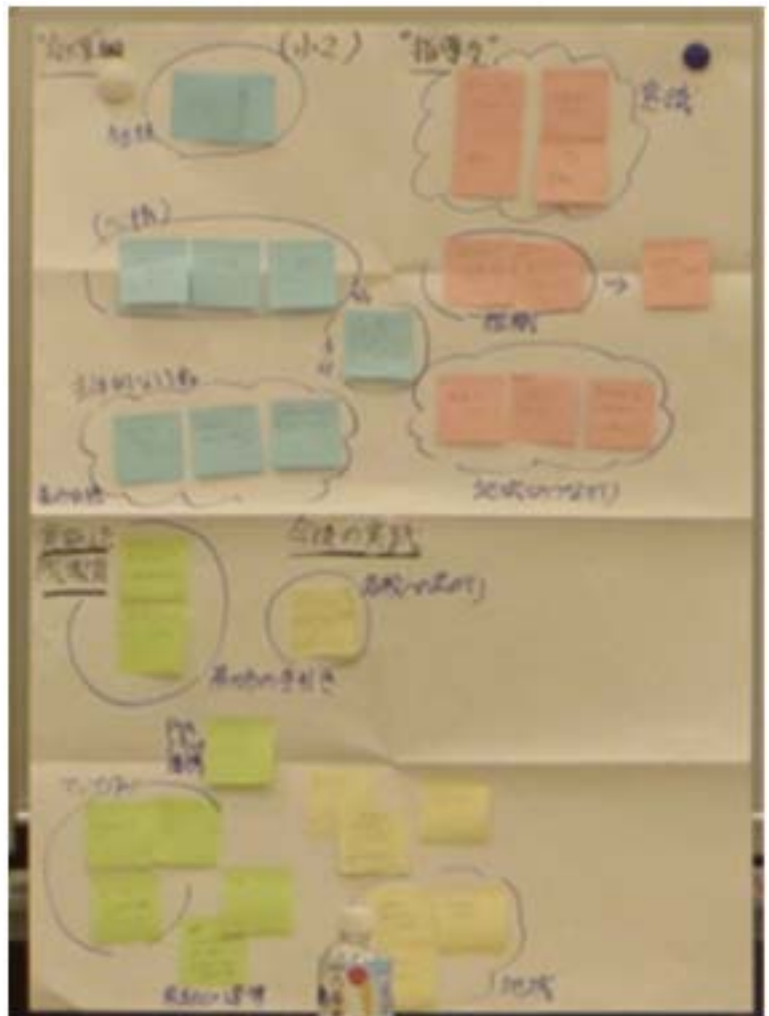
新庄愛郷会は子育てにすごくプライドを持っている地域であります。片田先生に質問に対して、「助成させていただいております」とさらっと言われましたけど、実は今、新庄小学校を新しく建てるのですが、愛郷会から2億円寄付していただいたんです。新庄中学校の素晴らしさ、新庄小学校の素晴らしさがあるのですが、そのバックにある地域の力が違うかなと思います。



『地域との連携』について、先ほど先生方も言われていましたが、田辺市の一つ目の課題も町内会の参加率の低さなんです。平均したら50%強です。ですから、何をしても形にはなるんですけども、参加率が非常に低いというのがあります。二つ目に、地域の方々が学校へ依存しているというのがあります。3.11があったときも、避難してきた方々が「お腹が空いたよ。次は何くれるんだ？」と市の防災の方に言っていたそうです。それから、先日、ある町内会の人から防災の課長に訴えがあったのは、「自分の地域は子どもがいない。子どもがいる地域は子どもとともに考える防災ができるんですけども、子どもがいないから自分の地域ではできない。だから、学校からもっと積極的にアプローチして欲しいんだ」と言われたそうです。これは、どこまでが学校でできるのかが、非常に難しいと思うんですね。あと、校区に町内会を8つも9つも抱えている学校もあるんです。そうすると、ここの町内会と連携したら、ここの町内会が怒ってくる。だから、組織が作れていないんです。それが非常に辛いと考えます。改善策として、本庁の防災まちづくり課と話をしているのは、学校に「地域と連携してくださいね」とお願いしても、これは学校も苦しいと思うんです。地域によっていろいろありますから。ですから、行政として、ある程度枠組みをつくってしまっ、「こうゆう組織でやりませんか？」ということ、防災から地域へ、教育委員会から学校へと両方のアプローチでやっていくことはできないかなと考えています。できたら来年の4月から、そういう組織が出来ないかなと話をしています。

『防災教育の効果』ですけども、やはり継続していくことが前提にあるんだ、ということは押さえました。他者への思いやりとか、気持ちを育てるにはすごく良い心の教育だなということと、当たり前のことですけども、最終的には「主体的に行動する」、これも育成しなければいけないということです。『指導力』としては、本気にならないといけない、上辺だけで言うてはいけないよ、学校と地域と親が本気になるかどうかで変わってくるなというような話しをしました。あと、『組織』として、今、どの自治体もそうだと思うのですが、学校は50代と20代の先生が多くて、中間が少ないという状況にあります。若い先生方は、きちっと教えてあげないと、「学校は地域の中にある」という意識が非常に薄いと思うんです。「自分と子どもとの関係だけで学校が動いている」というような意識を持っているような気がします。なの

で、管理職がもっとぐいぐい引っ張って行くべきだという意見と、やっぱり教員同士の横のつながりが大事じゃないかなという話をしました。あとは、『地域とのつながり』です。ここが一番大事かなという話をしました。あと、具体的な防災教育でしたら、やっぱりマップ作りをしている学校が多かったです。防災マップは作ることが目的ではなくて、「作ることによって子供たちにいろんな力がつくよ」と片田先生もよく言われていると思います。あと、学校から地域へ発信することであるとか、昨日、田辺第一小学校の左海さんの授業にあったように、リアリティをどう持たせるか。またどこまで持たせるかというのも問題だと思うんですけども、そのあたりも大事かなという話をしました。



c)小学校グループ3

発表者 松本 孝嗣 (釜石市教育委員会学校教育課 指導主事)

松本 まず、今の釜石市の現状についてお話しさせていただきます。子どもたちの状況ですが、まだまだ震災前の教育の状況にはまだまだ遠く及ばない状況です。特に、校舎が被災した鶴住居小学校、釜石市東中学校、そして唐丹小学校、唐丹中学校につきましては、校舎建築が始まっているとはいえ、学区外からスクールバスを使って登校している子供が、いまだ 80%程度います。あと仮設住宅に住んでいる子どもたちも、まだまだたくさんいるという状況です。また、震災によって家族の状況が変わって、就学援助を受けている子どもが 30~40%となっております。そして、震災の影響とみられる不登校の児童生徒の割合についてもまだまだ高い状況にございまして、今、県のほうで「心のサポート授業」を行っています。その中で、心と体の健康観察を震災後すぐに始めたんですが、きちんとしたサポートが必要だという子どもの割合もかなりまだ高いような状況にあります。ただ、その震災当時、就学していた子供については、学校教育でかなり助けられた部分が多いです。一方で、震災当時、未就学だった子供たちは、家にいてかなり不安な気持ちを背負ったまま、まだトラウマがなかなか抜けない状況にあります。以上、今の釜石市の状況を伝えさせていただきました。

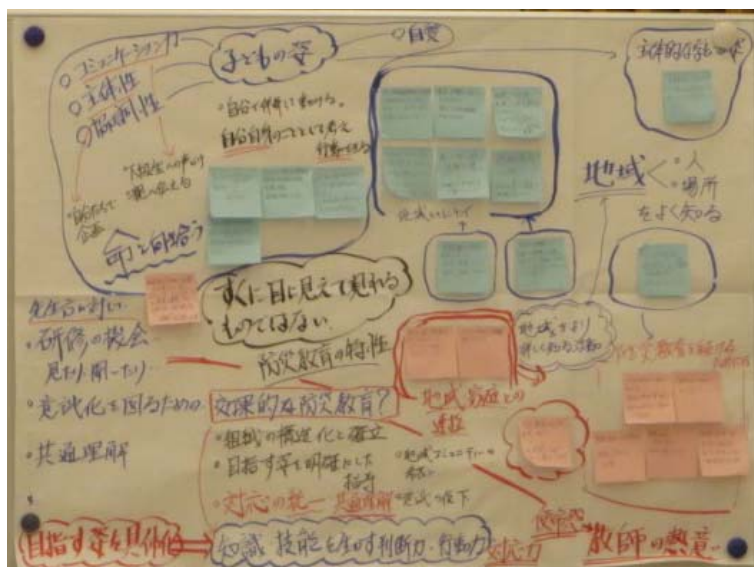


松本 孝嗣先生

テーマ1、コミュニケーション力ということで、「効果的な防災教育と言った場合、何ををもって効果とするのか」ということなのですが、まず防災教育の位置付けとして、教育の最終目標は“人づくり”なので、その人づくりを支える1つのパーツだろうと捉えてみました。そして、防災教育の効果について、『すぐ目に見えて現れるものではない』という特性を考えたときに、「どのように何ををもって効果とするのか」というのが、見えにくいだろうということが共通の話題として出されました。「効果がぱっと見られないからやる意味がない」ではなくて、子どもの姿から、きちんと効果とすべきであろうという結論です。防災教育を通して、子どもたちにどんな力をつけることができるのか、という視点で考えたときに、“コミュニケーション力”、“主体性”、“強調性”、“自覚”の四つが出てきました。先生方が目指す子どもの姿をきちんと明確にして、それに照らし合わせて子どもたちを見取ったときに、効果は確認できるのではないかと思います。例えば、下級生への声がけです。逃げるときに下級生に声がけする。あと学んだことをきちんと親に伝える。あと、今日の新庄中学校の生徒のように、自分たちできちんと企画して、それを進めることができる。このような子供の姿をきちんと見取る必要があるだろうという意見も出ました。

そして次、『教員に求められる指導力』とはどのようなものかについてです。大事なのは、教師の『熱意』だろうということです。「一部の先生任せになっている」「やる気の持続がなかなか難しい」「意識の低さ」など、我々指導者の今後の課題がたくさん出されました。その課題に対しては、研修の機会をきちんと設けるべきであろう。実際に見たり聞いたりすること。あとは、意識化を図るためになんらかの方策が必要だろう。共通理解も必要であろう。岩手県

は、人事異動が3年ごとに行われます。内陸の先生方が沿岸部に出てきます。そのため、現在、沿岸部の学校に、当時震災を経験された先生方ほとんど今いない状況なので、先生方の意識がバラバラです。私も震災当時、内陸にいたのですが、釜石市に来るまでは、防災教育の重要性については全然分かりませんでした。なので、先生方に対する意識付け、意欲付けというものは欠かすことができないのではないかなと思います。



次に、『効果的な防災教育とは何か』についてです。「防災教育には防災学習と防災指導があって、それをつなぐ道徳がある」という防災教育についてのきちんとした理解があった上で、『知識・技能を活かす判断力・行動力』を高めるような防災教育が、今後いっそう必要であろうという話も出されました。

『地域』についてです。防災教育の目指すものとして3点目に「学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする」ことが挙げられています。やっぱり地域というのは欠かせない視点の1つではないかなと思います。学校のみで行われているのは、閉ざされた防災教育です。防災教育は開かれたものでなくてはならないという視点から考えると、地域にきちんと広めてあげることが必要です。実際には、避難訓練も含めて防災教育がきちんと行われている地域は正直あまり多くはないんじゃないかなと思います。だからこそ、学校が発信源となって、地域を巻き込んで地域一体となった防災教育を進める必要があるだろうという意見も出されました。ただ、その地域との連携についても、さまざまな問題点もごさいます。地域コミュニティの低下だったり、地域のみなさんの意識の低下というものもあります。その中で、学校で行ったものをどのように家庭とか地域にかえしていくのかということ、授業参観で防災の授業を行ったり、学校でやったことを家庭へ伝えるという積極的な活動が、今後一層求められるのではないかなという意見も出されました。

最後に、「釜石の奇跡」と呼ばれているのですが、奇跡ではないんです。あれは、ずっと片田先生にご指導いただいた訓練の通りに、子どもたちが行動したということでの釜石市の姿と捉えていただければと思います。釜石市できちんとした防災教育が行われていなければ、失われた命はもっと多かつたのではないかと私は思っております。震災後、防災教育を核として「命の教育」を進めています。「命の教育」と名前を変えて3年目になります。市内14校の全てが命の教育のねらいに沿って、実践を続けているところです。その結果を、命の教育の実践事例集としてこのように1つの冊子にまとめてあります。今後も、子供たちを守るため、そして地域を守るため、命の教育を積極的に推進してまいりたいと思っております。

d)中学校グループ1

発表者 宮川 昭二 (黒潮町立大方中学校 主幹教諭)

宮川 黒潮町でも、片田先生に来て頂いて、小学校・中学校の防災主任が集まって、作業部会を開催しています。黒潮町は、年間10時間程度の防災学習と6回以上の避難訓練を各校で実施しています。



宮川 昭二先生

では、テーマ1、『防災教育のためのコミュニケーション能力』についてです。効果的な防災教育のためには、1年から3年まで系統的な防災学習をつくるのが大事じゃないかと思います。地域によ

ても違うのですが、ある程度大まかな筋を作っていかなければいけないだろうと。細かいところじゃなくて、大まかなところということで、話も出ていました。そして、それを普段の生活で行動にいかしたり、自分の命を自分で守るために、課題解決学習を通じて、そういう力を身につけていくのが大事じゃないかなという意見が出てきました。

『普段の生活で行動』『自分の命は自分で守る』については、津波被害、雪の被害、土砂災害など、学校によっても、地域によっても違うのですが、最終的に、どういう時にどういうふうに行動するのかという危機管理能力を身につけさせることが大事になる。これは、課題を自分たちで見つけて、その課題をどうやって克服していくかを考える学習でもあるんじゃないかなということです。片田先生が言われているように、基礎となる学習として防災学習を位置づけることができるんじゃないかという意見も出ていました。その中で、地域に出て行って、地域を理解することで、地域愛がうまれる。さらに、地域の方々に理解して頂いて、認められる、褒められることを通じて、自己肯定感が向上して行って、子どもたちも良い育ち方ができるという形がでてきました。『生徒の成長』として、どういう姿を求めるかについては、先ほども出ていましたが、短期的に数字で表れて評価できるというものではなく、長期的に評価する必要があるんじゃないだろうか。長期的ということでは、例えば個人が将来どう生きていくとか、地域のことを考えるっていうことで、先ほどから言っているように、それぞれの課題を自分の力で解決させる能力を身につけさせることが、生徒の成長じゃないかなと思います。だから、例えば、地域を出たとしても、東京で生活しても、大阪で生活しても、そこで震災が起こったときにも応用して使えるんじゃないかなと。

『教員に求められる指導力』についてです。そういう子どもたちを育てていくためには、子どもにどうなって欲しいという“理念”というか“目標”を、それぞれの教師、そして学校が持つことが必要じゃないかと。それを動かすのが、“熱意”なんじゃないかと思います。“熱意”があったら、行動力、想像力があるので、新しい物を作っていくとか、繋ぐコーディネート力が出てくるんじゃないかな。先ほどから出ているように中堅教員は少ないです。50代が多いので、そういう先生方が後に繋げていくということで。ただ一番大事なのは、スキルは後からついてくるので、「自分からやってみる」っていうことが必要じゃないかなと思います。「どんどんやってみよう」ということを若い先生に伝えていく。それでも、なかなかできないようだったら、ベテランの先生方が「やっていこう」という姿勢を学校全体が見つけていく。「見せて

いく」ことが大事かなということが出ていました。そこには教員も楽しむという姿勢が大事かなと。防災教育だから楽しんでやろうという姿勢が大事かなという風に出ていました。

テーマ2の『地域と連携した防災教育とその継続』についてです。子どもを、地域に出していく、出て行かせるということがよく出ていましたが、そのなかでも、学校と地域の両方にメリットがあるように、仕組みでいく必要があるかなと思います。しかし、その中で、連携の障壁となる抵抗勢力がある。「こんなことやりたいんです」「新しいことやりたいんです」と言っても、「前例がない」と言われて、そこで止まってしまう。そこを突破していく力が必要かな。突破していくためには、説明能力や説明責任もいるでしょうし、先ほど言ったように、「両方にメリ



ットがありますよ」ということを納得してもらうことが必要かなっていうふうに出ています。

そして、『継続のための仕組み』としては、“繋いでいく”というシステム作り。学校独自、地域独自じゃなくて、両方でやっていくためには、いろんな所を繋いでいかなければならない。公民館や老人会、町内会などから繋いでいくためのコーディネート役作りを担ってもらうシステムを作っていくのはどうかと。そういうコーディネート役、それから繋ぎ役なんかを増やしていったらいいんじゃないかなっていうふうに出ています。そして、その中で、マスコミを利用する、マスコミでいろんなことを情報発信しようということ。岩手に行ったときに、自分は新聞の写真に載ってましたので、それを買って、持って帰ったら、「宮川、サボってないな」と校長先生に分かってもらったので、すごく説得力があります。あとは、続けていくとマンネリ感がでてきますので、新しい物を取り組んでいくという発想力が必要です。そして、「やってよかったね」という達成感が絶対必要かなっていうふうに出ています。

そういうことで共通のキーワードとして、防災だけど、「楽しくワクワク」というのは絶対必要かなと。黒潮町からは畦地次長ときていますが、3回とも僕は楽しくワクワクして来ます。だから、年末の黒潮町もそういうかたちで、皆さん、嫌々来ないで、ぜひ楽しくワクワク来てください。

e)中学校グループ2

発表者 谷本 明 (田辺市立新庄中学校)

谷本 午前中は新庄中学校への訪問、ありがとうございます。まだ途中段階で、仕上がっていないグループばかりだったと思うんですけど、片田先生に話してもらったり、全国の先生方に来てもらうことで、あの子たちの励みに、次の内発的動機付けに、やる気に繋がっていくと思います。なので、こちらとしても、皆さんに来て頂いて有難かったです。

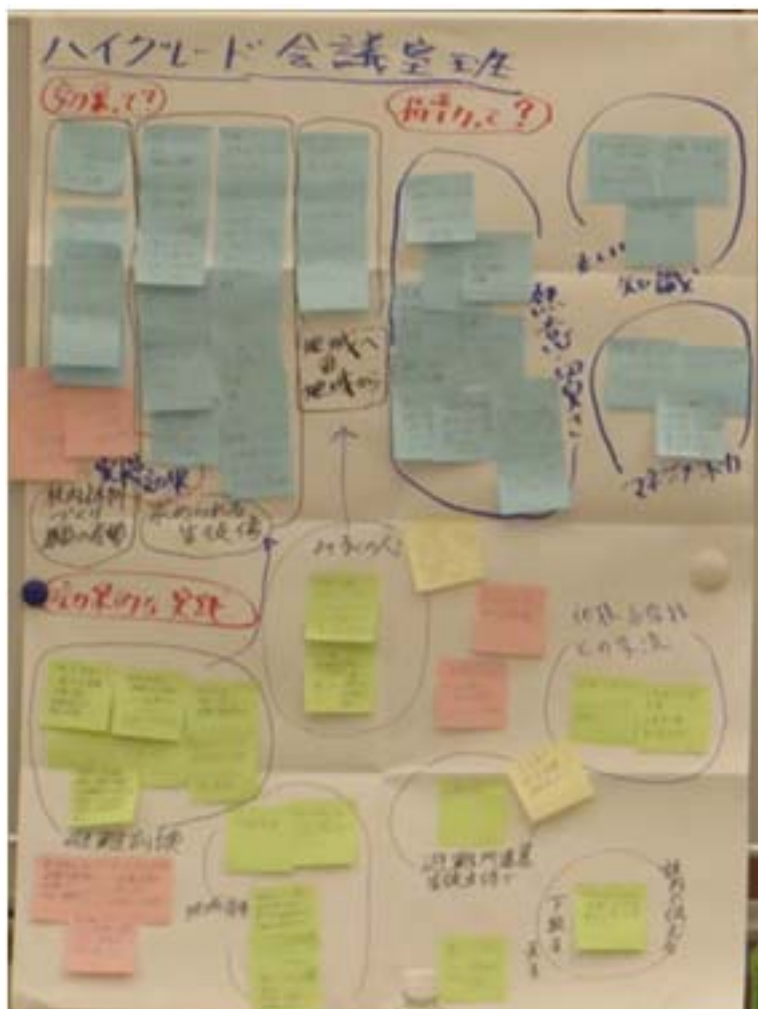


谷本 明先生

まず、防災教育の『効果』についてです。効果を上げるために、学校ではマニュアル化をしたりだとか、ゴールを設定して課題を決めたりだとか、そういったことが必要になるんじゃないかなということが出てきました。そして、期待される効果については、まずは「自分の命を守れる」ということが一番になってくると思います。あとは、「他者を助けてあげられる」といった共助の部分ですね。そういった効果があると思います。それ以外の部分で、生徒一人ひとりの成長とか、コミュニケーション能力だとか、正しい判断力とか、素早い行動力とか、生徒の防災以外の部分での効果というのも期待できるという意見がたくさん挙がってきています。そして、「地域から認められている」とか、学校からだけでなく地域と連携し、繋がりができるという効果も期待できるんじゃないかなという意見が出てきました。次に、その効果を出すための『教師の指導力』についてです。指導力の部分が、大きく3つに分けられるかなということでした。まずは教師の方も、津波や震災に対する“正しい知識”を持つことがまず大事じゃないかなという意見がでてきました。そして、“マネジメント力”です。いろいろな関係機関と連携を取ったり、学校の中で組織を運営していくときのマネジメント力というのも必要になってくるんじゃないかなという意見がでました。そして、一番大事なところですけども、“熱意・切実さ”です。教師の気持ちがないと子どもたちに入っていくんじゃないかという意見がたくさん出ました。“正しい知識”とか“熱意”とか、こういった部分は全員、学校全体の教師が持つべきもので、“マネジメント力”は、リーダー的な防災の担当の教員が持つ必要があるかなという意見も出ました。

そして、『具体的な授業案』についてです。例えば、生徒全員に防災袋を持ってこさせて、それを学校で保管しているという学校もありました。そして、その防災袋をどこに保管するかを議論した結果、避難する場所に保管するのが一番いいだろうということで、そこに常に置いておく。それを定期的に中身を確認したり、もっといい物ないかとかいう議論をすることによって、さらに防災の意識も高まるという効果も期待できるという意見がありました。あとは、アルファ米ですかね。企業から賞味期限に近い物を頂いて、それを全員で食べるというのを行ったりとか。あとは一番多かったのは、避難訓練ですね。地域と合同の避難訓練をしているという所はたくさんありました。そして、地域と合同、ただ単純に一緒にするだけじゃなくて、より高いレベルというか、ただやるだけじゃなくて、より多くの地域の方を呼べる避難訓練を目指しているという、意識の高い学校もありました。地域と一緒に避難訓練を行って、その後さらに発表会のようなものをしているという学校もありました。

テーマ 2、『地域と連携した防災教育』についてです。まず、具体的にどこと連携を取るかというのは、地域の小学校とか、公民館とか、あと消防とか、という意見が出ていました。僕自身が参考になったのは、海上保安庁と連携しているという学校もいくつかあったことです。ある学校は、船を出してもらって、船に乗って、生徒が沿岸部から地域を見ろという事をしてもらってました。またヘリコプターを出してもらった学校もありました。こちらから働きかけていくと、かなり協力してくれるということを知りましたので、是非またやってみようかなと思いました。あとは東北の学校とかですと、それ以外にNPOの団体とかとも連携をとっているという学校がありま



した。そして、最後、地域と連携をとる際に障壁となる部分です。例えばスクールバスを使っている学校で、スクールバスの登下校中に地震が起こった場合を想定して、避難経路を決めて、訓練したいという意見が出たそうなんですけども、民間のバス会社と町のバス会社の両方を使っているため、なかなかその意見が受け入れられていないというお話がありました。一方で、地域によっては、きちっと経路も決まって、バスでそういう訓練をしている地域もあるという意見もありました。そして、避難訓練についても、地域によっては、なかなか行政が協力してくれない。行政にお願いをしても、一斉放送というのは使えない状況だったりして、地域との合同避難訓練が難しいといったような学校もありました。いろんな取り組みをしているけど、それがまとまっていないので、そのデータ整理をする必要があるという意見もありました。『継続』するためにですけども、複数の教員で担当するのが大切じゃないかなという意見が出ました。岩手県ですと、教員が何年かごとに異動してしまうので、内陸の人と沿岸部の人との意識の差がかなり大きいという意見も出てきました。